

プロローグ 束の間の有名人

ベルナール・ファイがたどった運命について私はかなり以前から関心を持っていたが、ファイの生涯については、実のところ、占領期の国立図書館を指揮したということ以外、よく知らなかった。かつてファイは、ニューヨークではコロンビア大学で、パリではコレージュ・ド・フランスで教えたことがあった。数十年後、私もまた、彼のあとを追うようにして、この二つの教育機関で教えているので、もちろん気にはかかっていた。しかし、彼の前歴や、コロンビア大学——以前そこで彼に関する文書を調べたことはある——、コレージュ・ド・フランス、そしてBN^{ベイズ}〔フランス国立図書館の略称〕へと彼を導いた、その個人的、知的、政治的な経緯や、その後の波瀾万丈については、ほとんど何も知らなかった。

この人物の評判は良いものではない。ファイは私の知らない祖父二人——いずれも一九四〇年から一九四五年の間に亡くなった——と同じ世代に属している。〈解放〉のあとに生まれ、インドシナ戦争、アルジェリア戦争、ヴェトナム戦争の時代に育ち、早晩、先達と同じように自分もまた戦争を経験し、思春期に読んだサルトルの本

の記憶を胸に二十歳で死ぬのであろうと確信しながら成長した私の世代の人間は、解決不能の実存的な問いに常に苛まれ続けることになる。もし自分たちが一九四〇年から一九四四年の間に生きていたとしたら、どう行動しただろうか。私自身はどうふるまっただろうか。家族が占領者に闘いを挑み、傷を負い、投獄されたとしても自分自身はどうしたか、わかったものではない。あらゆる家族が分断され、そこにはファイの家族も含まれていた。果たして私は活動に身を投じただろうか。それは良いほうの側だったろうか。

いつかベルナル・ファイに本格的な関心を抱く機会がやってくるはずだと私は確信していた。そしてほどなく、立て続けに二つの思いがけない読書がその機会へと私を促してくれた。昨年「二〇〇七年」の冬、ニューヨークでの夕食会の折、隣席の女流詩人モーリー・マクレーンが、出版されたばかりの小さな書物を私にすすめた。ジャネット・マルコムによる『二つの人生——ガートルードとアリス』という本である。『ニューヨーカー』誌の記者でもある著者によるこの本は、二十世紀前半の国際モダニズムの女教皇ガートルード・スタインとその忠実な伴侶アリス・トクラスについての、軽快な筆致によるルポルタージュである。マルコムは特に、いずれもアメリカ人でありユダヤ人であるこの二人の女性——第一次世界大戦以前からフランスに暮らしていた二人は、一九四〇年にフランスを離れることを拒否した——が、そのあとに続いた四年間の暗い歳月を、いかにして支障なく乗り切ったかということを問うている。ヴィシー体制下の有力者であったファイはどうやら二人の女性の運命を注意深く見守っていたらしいのである。

ジャネット・マルコムの著作は、私にもうひとつの書物を思い出させた。それは一九四〇年から一九四四年までのBN館長としてのベルナル・ファイの行動に言及したもので、こちらはフランス語の本である。『ル・モンド』紙に載ったその書評を一年前におぼろげに目にしただけだった私はパリに戻るとすぐにそれを入手した。ジャン・マリー・グルモによる『図書館愛』という本がそれである。啓蒙主義を専門とするこの優れたフランス文学史家はこの本の中で、世界中の図書館を利用してきた自身の長い経験について自由に考察を巡らしている。

その筆頭にあげられる図書館がリシユリユー通りにあるBNであり、私もそこには足繁く通ったもので、非常に愛着があった。グルモはそこで少しづつ思い出すように、占領期のBNの生活がどのようなものだったかを問い、その館長の思い出にも触れている。

大西洋の両岸からそれぞれ出版されたこれら二つの書物の間には何の関係もなかったし、両者ともエピソードを多く語るタイプの書物であるが、ファイについて報告していることがらの内容によって、私にはこれらがいずれも劣らず驚くべきものであるように思われた。グルモとマルコム、賢明な大学人と熱心な雑誌記者、この二人がそれぞれの道筋で、特に探し求めたわけでもなく偶然、ファイという人物に出会った。そしてこの偶然の出会いによって二人は、それぞれのテーマを照らしだすために、ファイの人生に関するいくつかの細部を求めて、回り道に身を投じざるをえなかったのである。

ファイは占領期のBNの館長であった。数十年来ほぼ毎日のように図書館を利用してきたグルモがファイの亡霊に出くわしたという話はそれによって説明される。ところでファイはまた、ガートルード・スタインとアリス・トクラスの友人でもあった。そして暗い歲月の間、ファイが彼女たちの庇護者であったというのは本当のことらしい。このことからマルコムは、鼻をつまみながらもファイについていくらか語らざるをえなかった。グルモが狙いを定めている人物はBNの館長としてのファイであり、マルコムのそれはスタインとトクラスの親しい友人としてのファイである。それぞれにおいて人間のもう一方の側面は闇に置かれる——スタインの観点からすればBNはどうでもよく、BNの観点からすればスタインはどうでもよい——わけであるが、二人がそれぞれの探求の道すがら提供してくれる情報はじつに興味深く、また矛盾を含んでもいて、さらには同時にきわめて不気味なものでもあるため、私はただじっとしているわけにはいかなかった。

したがって、本書のそもそもの始まりはマルコムとグルモの著作の書評を書くことだったのであるが、BN、今日ではBNFすなわちフランス国立図書館となつているところへ訪問を繰り返すうち——そこへ赴く際はかつ

てリシュリユー通りに通い詰めた頃の思い出に胸が締めつけられずにはいらなかったのであるが——、ファイの物語というこの主題は、一本の書評論文に許される数ページの規模をすぐに超え、より深く突っ込んだ研究の対象になるはずだという確信を抱くに至ったのである。私は以前、ドレフュス事件に関わらざるをえなかった何人かの知識人の事例について、たとえば、二十世紀の古典とも言える大作家ではプルーストとペギー、それよりは規模の小さい文芸批評家、教授、著作家ではフェルディナン・ブリュヌチエール、ギュスターヴ・ランソン、ジュリアン・バンダ、アルベール・チボーデ——この人たちはいずれも、フランスの分断を象徴する証言者である——について検討を加えたことがあった。ドレフュス事件以後、すべてのフランス人同様、あらゆる作家、知識人が直面せざるをえなかった決定的な第二の二者択一、それを代表するのがヴィシーである。グールモとマルコム¹の書物の行間に垣間見えていたその人物については、混沌とした感情と複雑な来歴を持っているらしいことが察せられたが、今や私もまたこの人物に注意を集中する時機が到来していた。ファイは世間に推奨できるような人物ではなかった。それどころかきわめて不快な人物ですらあり、政治のために道徳を犠牲にした知識人であったが、彼のたどった道のりには、こちらを深く戸惑わせるものがあるうえに、ロマネスクなエピソードや、情念がもたらす意外な展開もいくらか見受けられるのである。善意だけで物語が最善になるわけではない²。〔良心で良きわけではない〕という作家アン³。リ・ジャンソンの言葉をもじっている〕。

私はファイをよりよく知ろうと努めた。とりわけ戦間期の彼の行動、フランスとアメリカ合衆国の間の往還、美学的な前衛とイデオロギー的な伝統主義との間の揺動についてであるが、それは、コロンビア大学とコレージュ・ド・フランスの教授であり、ツアラやピカソの近しい友人であった人物がいかにして、大物の対独協力者になったのかを理解しようとするためであった。ファイは一九二〇年代および一九三〇年代のパリの文芸社交界の至るところに顔を出す存在であり、ガートルード・スタインとアリス・トクラスと付き合うだけでなく、三百もの人間と付き合いがあった。やはり彼に近かったジュリアン・グリーンによると、その三百人は当時のパリの名

士録を構成し、毎日、フォーブール・サン＝ジェルマンのサロンやモンパルナスのバーで互いに顔を合わせていたという。

ところで、再びニューヨークで、私が自分のこの研究を仕上げつつあった頃、私の関心事を知っていたジャン・イヴ・タディエから一通の電子メールが届いた。最近、分厚い学術書が一冊、パリで出版された——何たる災難！——それは優に百ページ余りをファイに費やしているというのである。マルチヌ・ブーランによる『略奪された書物、監視された読書——占領期のフランスの図書館』がそれであった。^③ジャン＝マリイ・グールモすでに、占領期のBNに関するブーランの論文に示唆を受けていたが、新しく出たブーランの書物はそれまでの研究を大幅に増補したものだ。それはファイの図書館運営に関するBNの文書目録と一九四六年にセーヌ県の法廷に提出された予審調書の精査に基づいていた。それはこの人物の決定版となるモノグラフィーなのか。その研究書はテーマを汲み尽くしているのか。それは私の肖像の試みを無駄なものにするのか、それとも逆に私の仕事を補って賦活してくれるものなのか。タオルを投げて降参すべきか、それとも辛抱強く自分の仕事を完遂すべきか。

マルチヌ・ブーランは、BNの長としてのファイの行動と、一九四〇年夏以降、長命の生涯のちょうど中葉に当たる一九四〇年から一九四四年までの四年間——少なくとも一九四二年四月、文部大臣（一九三二年以前の省名は公教育省、以後は国民教育省）となるため、制度史的には公教育大臣と国民教育大臣を区別する必要があるが、本訳書では便宜上「文部大臣」という訳語で統一した——アベル・ボナルと共にピエール・ラヴァルが政権に復帰するまで自由にふるまうことができた二年足らずの間——解散させられたフリーメーソンの古文書をBNで蒐集し、活用することをペタンに命じられて以後、フリーメーソンの迫害においてファイが果たした責任に何よりも関心を注いでいる。その反面、戦間期にファイがたどった軌跡はブーランの研究対象には含まれておらず、趣味において最も先端的で風俗において最も解放されていたパリとアメリカの文学界と社交界でファイが結んだ数多くの関係についても語られてはいない。さらに、ブーランは諸々の事件から距離を置いた歴史家の確信と良心でもって

その判断を下している結果、時代の不安感や人間の曖昧さといったものは大幅に消し去られている。

プーランの研究書を読んだあとも、私はベルナル・ファイの性格に関心を惹かれつづけた。BNにおける、あるいは反フリーメーソン闘争における彼の行いや身振り——その数年間はファイの人生でも最もよく知られ、資料も最も多い時期であるため、私がそこへ立ち戻ることはほとんどないだろう——そうした細部は、《ル・ブフ・シユル・ル・トワ》〔戦間期にコクトーと知識人たちが集ったこと〕から「国民革命」〔ウイシー体制の公的イデオロギー〕へ、アカデミーの自由から少数独裁体制へ、あるいは高尚な文学から恥すべき密告へと転向した事実と比べると、彼の人生においてはそのほど突飛でない出来事のように思われるのである。幸いにしてドレフュス事件も占領期も知らず、それほどに重大な選択に直面させられたこともない私は、一方でまた、先達が犯した誤謬を前に、古文書学者の超然とした姿勢を採ることもできないと感じている。いずれにせよファイはすでに裁かれ、断罪されたのではなかったか——しかも冷酷なまでに、イギリス人やアメリカ人に対しては単なる文書係であるとみずから偽る術を心得ていたナチスの責任者たちよりも厳しい仕方で……。ファイについて、ファイに関することで読み得たすべてのもののあとで、彼のような人物について私が困惑しつづけるのは、対独協力、敵との内通、ゲシュタポの代理となっておそらくは否応なく犯した悪事や犯罪以上に、自分自身への裏切り、自分の祖国への裏切り、自分の青春の否定、複数指導体制「共和政」の否認、あるいは友情の放棄なのである。この占領期の数年の間に行われた、人びとの諸々の選択のあり方を見るとき、私たちは強い衝撃を受けずにはいられないだろう。

そのようなわけで、現在までのところ、人びとが忘れることを選択してきた人物——たとえばコレージュ・ド・フランスでは歴代教授陣の肖像写真が居並ぶ廊下にファイの写真だけは欠けており、国立図書館では歴代館長の大理石の名板が並ぶなかにファイの名前だけは欠けている。人びとが彼の話をするとき、陰謀を企む者たちが囁きあうように、気兼ねしながら話をする——そんな人物であるベルナル・ファイは、今日、誰でもそうなる権利を持つとされる十五分だけの有名な人〔アメリカのポップアーティスト、アンディ・ウォーホルの有名な言葉〕よりはいくらか長い間、束の間の有名

人であつたにちがひないのである。しかし、ジャン・マリイ・グールモとジャネット・マルコムのとに続いて歩きながらも彼らのような優雅さを持ち合わせず、マルチーヌ・プーランの調査を補いながらも人物の人生の他の時期に関する同じ程度の博識を開陳することもできず、私自身が描き出したファイの肖像は未だ、フランス流あるいはアメリカ流の網羅的な伝記の域に到達しているとは言いがたい。二十世紀を生きたファイの数奇な生涯を想うと、そうした伝記があれば、大いに価値をもつものになるだろう。⁽⁴⁾

最後に、本書は弁護の書ではないことを明らかにしておきたい。私はベルナル・ファイに対していかなる共感も持たない。私は至るところ彼のあとを注意深く追つたが、親しみを感ぜながら追つたのではない。私が発見したことがらのうちいかなるものも彼に對する強い弾劾の氣持ちを和らげることはなかった。しかし、ブルーストの熱心な読者からペタン元帥の下僕へと移行していった彼、市民権剥奪⁽⁵⁾と無期懲役刑に処されたコレージュ・ド・フランス教授の彼について、さらに知るべき必要はあり、理解しようと試みる必要はあつたのである。それでも告白しなければならぬが、結局のところ、彼の不吉な政治参加と頑迷固陋な態度の謎は私にとつてまったく解決されないままである。

パリーニューヨーク

二〇〇七年十二月—二〇〇八年十二月